ヨコハマアートサイト
Yokohama Art Site

特集

まちと詩（うた）

子どもの本＆ クーベルチップにて
左から、歌人の千葉聡さん、クーベルチップの中村裕子さん・神保佳子さん

vol. 035
2023

特集

まちと詩（うた）

a.

b.

レポート1

子どもの本＆ クーベルチップ

クーベルチップ歌会

子どもの本の周りにあるもの

弘明寺商店街を横切る大岡川沿いを歩くと、小さな本屋さんが現れる。中を覗（のぞ）くとたくさんの絵本があり、その間を埋めるように絵やぬいぐるみがぎゅっと並べられている。可愛らしい熊が描かれた看板には「子どもの本＆ クーベルチップ」という店名があった。「実は、PICTURE BOOK（絵本）を逆さに読んでKOOBERUTCIP（クーベルチップ）なんですよ」と教えてくれたのは店主の中村裕子さん。「子ども本＆の後ろは“何か”が入るスペースをあえて空けています。たとえば画家や作家、出版社等、本にかかわるいろんなものが入ると思っています。本を売るだけじゃない、そこから広がるものが集まる場を目指しています」。クーベルチップでは絵本の原画展や読書会、トークイベントが毎月行われ、イベントカレンダーはにぎやかだ。最近では学校や図書館、保育園、子育て支援拠点に出張本屋をひらくなど活動の幅を広げているという。

つくり手の思いごと手渡す

中村さんは共に働く神保佳子さんと二人三脚で店を切り盛りしてきた。ふたりの出会いは上大岡にあった児童書店「えほんやさん」の「大人の読む児童文学講座」。「えほんやさん」が2008 年に閉店する際、大人が絵本に出会える場を守りたいという思いからふたりは「店舗を持たない書店」としての活動を開始、2016 年に実店舗を開店した。ハキハキと話す中村さんの横で、神保さんはゆったりと語る。「子どもの本は子どもだけのものじゃないと思っています。また、子どもに手渡す前に大人が本を知ることも大事です。本づくりにかかわるいろんなつくり手の思いを一緒に届けたいです」。

横浜のまちで短歌や現代詩など
「詩(うた)」にまつわる活動を行うみなさんにお話を伺いました。

レポート1 子どもの本＆ クーベルチップ「クーベルチップ歌会」

レポート2 中村剛彦さん「若葉町コトダマップ」

レポート3 松下育男さん「詩の教室」

d.

c.

a. 店の外観

b. 内観、本棚の片側の壁では原画展を常時行っている

c. 左から、歌人の千葉聡さん、
クーベルチップの中村裕子さん・神保佳子さん

d. クーベルチップ歌会

この店の常連のひとりが高校教師であり、歌人の千葉聡さん。数あるイベントの中で異彩を放つ「クーベルチップ歌会」の主宰者だ。一見、つながりの見えない短歌と絵本。その出会いは千葉さんが偶然、店の前を通りがかったことだという。「初めて訪れたときからこの場所に惹(ひ)かれました。お二人と本のことを語り合っていると時間があっという間で。気づけばたくさんの本を両手に抱えています。話を聞いてもらって本を選べる本屋さんって今ではなかなかありませんから」。

地域で交わる詩(うた)たち

やがて、千葉さんはここで歌会を開きたいとクーベルチップに相談した。「思いもよらない提案でしたが、千葉さんの本のイベントで短歌を詠んでみたいという地域の人の声を多く聞いていたこともあり快諾しました。今年で3 年目、今ではクーベルチップの柱の一つです」とふたりは微笑む。千葉さんは「絵本と短歌の組み合わせは意外に思われるかもしれませんが、歌人には絵本を書いたり翻訳したりする人が多く、親和性が高いものです。参加者からも大変喜ばれ、ここで本を買って帰る人も多いです。他ジャンルがゆるやかに影響しあう場になっていると思います」と話す。歌会には市内外から30～40代を中心に幅広い年代が集まり、それぞれが詠んできた短歌を互いに読み、語り合う。「大人になってからは立場ありきで人と出会うことが多いですが、ここでは、どんな言葉をつかう人なのかという視点だけで接することができます」。

子どもの本から広がる多様な文化が集まる場を地域に開くクーベルチップ。短歌というもう一つの視点が加わり、ここにしかない新しい詩(うた)が生まれている。

子どもの本＆ クーベルチップ
横浜市南区大岡2-1-17 セレサ弘明寺102
営業時間：木～土曜日 12:00～18:00、日曜日 12:00～17:00
TEL,FAX：045-334-8702
Facebook: https://www.facebook.com/100057631501845
Twitter: https://twitter.com/QoGX13rxR1VjXuH

レポート2

中村剛彦（たけひこ）さん「若葉町コトダマップ」

横浜の地域に眠る言葉を聞く

沈黙の言葉を拾って

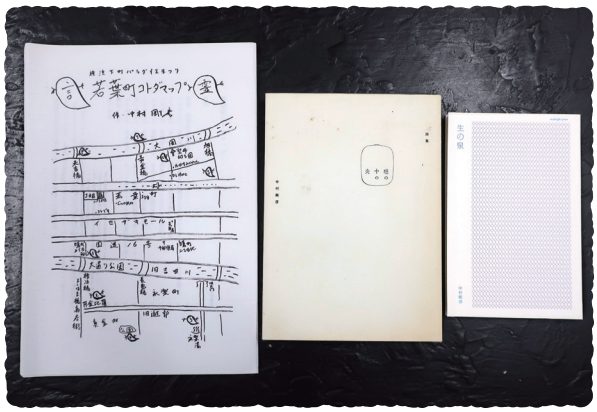
「若葉町コトダマップ」（横浜下町パラダイスまつり実行委員会主催・ヨコハマアートサイト参加事業）は、若葉町近辺の地域を描いた近現代作家の言葉をマッピングする企画だ。まち歩きをしながら実際にこの場所に立って朗読をすることで、過去の歴史と今をみつめる。主体となったのは横浜生まれ、横浜育ちの詩人・中村剛彦さん。「日本の近代化は横浜の開港から始まったとも言えるでしょう。しかしその発展の裏側には歴史に残らない無数の声があります。特に若葉町付近には接客業の女性たちが多く暮らしていました。無名の人が抱える、凄惨で口にできない声を私は「沈黙の言葉」と呼んでいますが、作家たちはそんな「沈黙の言葉」をどうにか拾って言葉に残しています。現在も複雑な状況を抱えて暮らす人が多いこの土地でもう一度、彼らの言葉を聞くことから気づきが生まれると考えています」。

多文化が抱える複雑さから

今年1月に一つの区切りを迎えた「若葉町コトダマップ」は冊子としてまとめられたほか、今年度は記録映像をYouTubeに公開した。現在、中村さんは横浜と詩を見つめる活動として第2・4金曜日にマリンFMのコーナー「詩人中村剛彦の折々の詩」にて横浜にまつわる詩を中心に紹介している。「横浜にはさまざまなタイプの詩人がいます。その理由の一つに港町には多様な文化が集まるということが挙げられます。しかしそれは外国の人がたくさんいて多文化共生ができるという単純な話ではありません。そこには差別や軋轢が必ず起こります。文化が集まることは豊かさでもあり、近代が抱える複雑さが凝縮されることでもあります。私はそういったひと筋縄ではいかない状況にこそ、詩人が必要とされるのではないかと思っています」。近年では「ナラティヴ ナラティヴ」という企画で、幅広い年代に向けて「語り」に焦点を当てた活動に取り組んでいる中村さん。地域に眠る語りを呼び起こし、詩で現在につないでいる。

a.

b.



c.

a. 中村剛彦さん
b. マリンFMハンマーヘッドスタジオにて、ラジオ公開収録の様子
c. 冊子「若葉町コトダマップ」（映像作品〈https://youtu.be/cCX2OqHd_-o〉）
中村剛彦さんの詩集『壜の中の炎』『生の泉』（ともにミッドナイト・プレス）

中村剛彦さんTwitter:@takeandbonny
ナラティヴ ナラティヴ
https://narranarra.com/

レポート3

松下育男さん「詩の教室」

詩とどう付き合っていくかを一緒に考えていく場

ここに生きていることの表出

詩人・松下育男さんが横浜で「詩の教室」を始めたのは2017年のこと。長年勤めた会社を定年で退職し、何をしようかと考えたときに詩の教室を思いたった。参加者は自身がSNSで呼びかけ、場所は横浜のビルの一室を借りた。教室には詩人として活躍する人と初心者が半々くらいのバランスで20名ほど集まった。教室はいつも松下さんによる詩の話から始まる。「この教室は詩とどうやって付き合っていくかを一緒に考えていく場所だと思っています。詩を書くこと、それは自分がここに生きていることの表出なのです。人の人生に優劣がつけられないように、詩を書くという行為に序列はないと思います。表し方に上手い下手はありますが、根本では同じです。受賞を目指すのもいいですが、その前にいかに詩と付き合って、楽しく生きていけるかが大事なのではないかと思います」。

書くこと、読むことの両方から

教室の後半では松下さんだけでなく参加者同士でそれぞれが書いてきた詩を読み、感想やアイデアを交わし合う。「詩は上達したら良い詩ばかり書けるようになるというものではありません。たくさんの下手な詩の中に、ふと優れた詩が混じっているという具合です。でも、それが優れた詩なのかどうか、自分ではわからないものです。そこで読み手の存在が大切になってきます。自分では意外なものが、評価されることもよくあります。読んでもらうこと、そして他人の詩を読むこと。このことで自分の詩を読む力もつきます。単純な共感ではなく、心から他者と接続する感覚がつかめてくると思います。書く力は読む力とつながっていますから、その両者が育っていることが詩にとって大切なのです」。

横浜の詩の教室はコロナ禍を経てオンラインにかたちを変えたが、現在も継続している。そしてこれまで教室で松下さんが語ったことは昨年、『これから詩を読み、書くひとのための詩の教室』（思潮社、2022年）にまとめられた。実際に詩を書く人のみならず、私たちが生きていくこと自体にかかわる言葉を、松下さんはさまざまな場所で語り続けている。

a.

b.

a. 松下育男さん
b. 横浜の詩の教室（buoyの会）で発行した「詩誌buoy」と『これから詩を読み、書くひとのための詩の教室』、現代詩文庫『松下育男詩集』、詩集『コーヒーに砂糖は入れない』（すべて思潮社）

松下育男さんTwitter：@fampine

今回の取材先のみなさんに共通して感じたのは、地域における歴史や、人との交流、ジャンルを超えた相互的なかかわりなど、作品や自分自身の「まわり」を見つめることを大事にしているということだった。その意識が場をひらく活動につながっているのだろう。生活と共にある文化のあり方が、静かに共有される場所が横浜のまちにひらかれている。

テーマ	ヨコハマアートサイト2022報告会
参加者	「ヨコハマアートサイト2022」参加団体のみなさん
ゲスト	佐塚玲子（特定非営利活動法人よこはま地域福祉研究センター副理事長・センター長） 宮下美穂（NPO法人アートフル・アクション事務局長）
聞き手・進行	小川智紀（ヨコハマアートサイト事務局）
日時	2023年3月11日(土)
場所	横浜市役所アトリウム

「ヨコハマアートサイト2022」の報告会が横浜市役所アトリウムにて開催されました。コロナ禍での中止やオンライン開催を経て、対面での開催は3年ぶりとなりました。ゲストにはヨコハマアートサイト2022の選考委員である特定非営利活動法人よこはま地域福祉研究センター副理事長・センター長の佐塚玲子さん、NPO法人アートフル・アクション事務局長の宮下美穂さんにお越しいただきました。

2022年度のヨコハマアートサイトはコロナによる制限が緩和されつつある中で、多くの事業が対面での実施を再開しました。団体による報告の中ではアートを通して身体を動かしたり、人とふれあうことで、リモート化が進む中で失われていた身体性を取り戻すことにつながったという声が多くありました。同時に、地域の中で生まれている孤立・孤独に向き合う必要性を以前よりも強く感じたという話もあり、対面実施再開の喜びとともに、コロナで変化した現状を共有しました。

佐塚さんは「今年は出会い直しの年になったと感じています。コロナが蔓延した過去3年、不安や葛藤の中で、社会、地域、そして自分自身と向き合い改めて、「出会う」ことの大切さ「心が動く」ことの大切さを感じたのではないかと思います。アートは、人や地域とのつながりが薄れてしまった人にとっても出会い、心動く、大切なものです。たくさんの個性豊かな活き活きとしたアプローチから気づかせて頂きました」と地域の中にアートがあることの重要性を語りました。

宮下さんは「何かあったときにアートはその問題を直接解決するものではありませんが、自分がつくったものが誰かに届いた喜びが自身の肯定につながったり、みんなで何かを体験したりつくったりすることが地域の関係性を育んだり、アートにまつわる一つひとつが人や地域の強さにつながっていくのではないかと思います」と文化芸術が持つ力について語りました。

2023年度の参加団体も5月末に決定しました。次号より、本誌でもご紹介します。今後の活動にご期待ください！

左：チラシの中心は、みんなで作ったロゴとキャッチコピー
右：エントランスホールはにぎわいの中心になりました

～博物館のある街の文化祭～

寄稿：羽毛田 智幸

横浜市歴史博物館で行われた「歴史未来フェス」について、
主任学芸員の羽毛田智幸さんが語ってくださいました！

都筑区の「センター北」と聞いてどんな街をみなさんは想像されるでしょうか？ 観覧車、ショッピングモールなどイメージは人それぞれだと思います。1995年に横浜市歴史博物館は開館しましたが、それに先立つ1993年に横浜市営地下鉄のセンター北駅は開業しました。当時をご存じの方は、「駅から博物館が見えた」「駅前にコンビニが1軒しかなかった」とおっしゃいます。およそ2000年以降からお店や施設ができはじめ、街のようすが大きく変わり、この街で生活を始める方も増えました。

このたび横浜市歴史博物館では6月2～4日の3日間、「歴史未来フェス」を開催しました。これまでは「博物館感謝デー」として開催してきたイベントですが、開館30周年を迎えようとする中で、隣地に開館することとなった都筑区民文化センターの建築工事が進む様子を見るにつれ、「街の歴史をどうやって未来や地域に伝えていこうか」「もっと地域で活動する団体や人々とつながっていきたい」「横浜にとって大切な節目である開港記念日にこのエリアでイベントをやりたい」と思い、企画をスタートしました。イベントのつくり方もこれまでとは変えて、毎月博物館の前の歩道や軒下でマルシェを主催する「みなきたマルシェ実行委員会」さんと一緒に進めました。「歴史未来フェス」の名前もロゴも、一緒に相談する中で生まれてきたものです。

とかく博物館の建物は敷居が高く、入りにくいという方もいらっしゃいます。こうした機会に中まで足を運んでいただければ、どんな施設があって、どう使おうか？ と考えてもらえるのではないかと思いました。展示を見るだけではなく、出展者として博物館を活動の場所に使う、という文化祭的な体験を多くの方に味わってもらうことで、歴史未来フェスが地域にとっても必要な、そして大切なイベントになっていくことを願っています。

個人・団体をあわせ、出展者は40を超えました。大雨に降られる日もありましたが、3日間で5000人を超える地域のみなさんに楽しんでいただけました。今回のフェスを一緒に立ち上げてくれた多くの方々に感謝申し上げます。来年もまたお会いできることを楽しみにしています。

はけた ともゆき　公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団 主任学芸員

1978年生まれ。横浜市緑区出身。早稲田大学 第二文学部 歴史・民俗系専修卒業、神奈川大学 歴史民俗資料学研究科 歴史民俗資料学専攻 博士前期課程修了。 厚木市郷土資料館臨時職員、川崎市市民ミュージアム学芸員、神奈川大学国際常民文化研究機構共同研究者等を経て、2011年8月より横浜市歴史博物館学芸員。2020年4月より現職。専門は日本民俗学、民具研究、博物館学。

事務局うろうろ日記

ヨコハマアートサイト事務局は、今日も横浜市内の
あっちこっちへうろうろしています。

3月17日金曜日
若葉町ウォーフ開場５周年記念企画リーディングミュージカル「CABARET」を観る。歌と朗読により、劇場の空間がキャバレーの雰囲気に包まれていた。物語が進むにつれ、登場人物の置かれる状況が会場のある地域の歴史に重なってくる。この場所を生きる人の声なき声が作品に表れているようだった。

3月21日火曜日
瀬谷区民文化センターあじさいプラザの開館１周年イベント「プラザ・アートウィーク2023」へ。ギャラリーでは公募で集まった写真やパッチワーク、陶芸といった市民の作品が展示されていた。隣の部屋では、瀬谷における養蚕の歴史などのパネル展示も。地域に暮らす人々とともにある文化の今とこれまでを垣間見た。

5月26日金曜日
横浜人形の家にて企画展「ぬいぐるみのげんざいち」を観る。ぬいぐるみの展示とともに、持ち主や作者との関係性が語られる。近年「ぬい撮り」などが流行しコロナ禍以降の社会的な現象と捉えられる一方、その語りはプライベートで親密なものを感じさせる。ぬいぐるみとの関係性をふりかえる時間になった。

5月26日金曜日
7artscafeにて「AVIARY OF DREAMS - 空飛ぶ夢」を観る。鮮やかな魚をモチーフにしたダイナミックな作品と、小さな鳥をモチーフにした繊細な作品が互いに影響し、生かし合う。外国にルーツを持つ若き2人の作家が自身のアイデンティティを探る手つきを辿(たど)るうちに、それぞれが描く想像の世界に誘われていく。

ヨコハマアートサイトとは

横浜市地域文化サポート事業。地域課題の解決にアプローチする文化芸術活動、文化芸術の持つ創造性をコミュニティやまちの活性化と結びつける活動、ヨコハマの個性ある文化芸術を市内外へ発信する活動を広く公募し、支援する事業です。

事務局・お問い合わせ

ヨコハマアートサイト事務局（認定NPO法人 STスポット横浜、横浜市にぎわいスポーツ文化局）
〒220-0004 横浜市西区北幸1-11-15 横浜ST ビル B1F（認定NPO 法人ST スポット横浜 地域連携事業部 内）
TEL:045-325-0410　FAX:045-325-0414　MAIL:office@y-artsite.org　https://y-artsite.org

@Y_Artsite　ヨコハマアートサイト　ヨコハマアートサイトに関することを中心に、横浜市内のさまざまな地域文化について発信します。

季刊ヨコハマアートサイト vol.035
発行：ヨコハマアートサイト事務局　編集：認定NPO法人 STスポット横浜　編集協力：大谷薫子　取材・テキスト：小川智紀、森崎花、田中真実
デザイン：小池佑子　撮影（表紙・特集1 a-c）：紀あさ　印刷・製本：共進印刷株式会社　発行日：2023年6月30日
季刊誌についてのご意見・ご感想もお待ちしております。